

アタッチメント形成・ペアレンティングトレーニング・ 応用行動分析の手法を用いた母子のかかわり

松田 枝織 (高知県公立小学校)¹

是永かな子 (高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門
高知ギルバーク発達神経精神医学センター)²

Relationship between Mother and Child by Using Method of Attachment, Parenting Training and Applied Behavior Analysis

Shiori Matsuda¹, Kanako Korenaga²

1: A Junior high school in Kochi Prefecture, 2: Kochi University Research and Education Faculty
Humanities and Social Science Cluster Education Unit, Kochi Gillberg Neuropsychiatry Centre

抄 録

本研究では、アタッチメント形成、ペアレンティングトレーニング、応用行動分析の手法を用いた母親の介入について、対象児が生後5ヶ月時から2歳10ヶ月時まで時期のかかわりについて考察した。具体的には、アタッチメント形成では肯定的自己像を育むための呼名の工夫、基本的信頼感の形成のための替え歌、スキンシップを意識した指文字、うまれっこ、くすぐり等を行った。ペアレンティングトレーニングとしてのネガティブな情動のコントロールでは、呼名の変更、ブロークンレコード、スモール・ステップを意識してかかわりを行った。応用行動分析では、視覚と言語化によるプロンプト、トークンによる社会的適応行動の強化を行った。母親が意図して好意的・肯定的な言葉がけを行うこと、暴力・暴言・過干渉に至ることを回避するかかわりを心がけること、適応行動の促進・強化を図る対応を行うことで、安定的な母子関係を維持することを目指した。母子のかかわりは双方向であるため、それぞれの気質や特性を配慮しながら、継続的に介入を行うことが重要である。

キーワード：アタッチメント、応用行動分析、ペアレンティングトレーニング、自尊感情

1. 問題の所在と目的

児童虐待が問題視されるようになって久しい。自治体においても、保健師等による新生児全戸訪問等様々な対策が取られている¹。しかし、事象が起こってからの事後対応は非常に難しく、また支援期間も長期化することが多い²。また増加傾向にある虐待ケースを限られた職員で担当するのは、職員個人にかかる負担も大きいと思われる。

児童虐待は、種々の要因によって発生すると考えられるが、その要因は決して単純なものではない。子どもの気質と親の気質が異なっていることによる親の側の育児困難感の増幅、その時点でのいわゆる「育てにくい子」と総称される発達の凸凹の大きさ、子どもに対する育児スキル構築の難しさ、核家族化等の家族構成人員の少なさによる一人にかかる荷重の大きさ等が考えられる³。渡辺は子育てにおいては、親自身が知らぬ間に押し殺してきた記憶が子どもに伝わることを指摘し、また同時に心の問題は、ある日突然出現するのではなく毎日の積み重ねから生まれるとも述べている⁴。親自体の積み残してきた発達課題や心理的葛藤・抑圧、親子双方の気質、家庭において限定的

な者、多くの場合母親となるが、負担の大きい役割を固定的に担う等の小さなストレス状況がいくつも積み重なり、またその要因が複雑に絡み合い、深刻な虐待ケースが発生すると考えられる。育児においては、親・大人による子どもへの働きかけの側面、親から子どもが焦点化されがちだが、子どもも親・大人に対し、様々な働きかけを行っている。子どもから親へのかかわり、例えば新生児微笑等である。米澤は愛着の問題がかかわるとされるケースでは、学校や保育所・幼稚園側は介入しにくい「家庭の問題」「親の養育態度の問題」であると判断してしまい、あるいはそういう対応をせざるを得ず、子どもの問題行動は放置されたままになることが極めて多いのが現実である、と指摘する⁵。また同著書の中で、米澤は愛着形成不全、もしくは、未形成の問題は産んだ母親だけの責任だけではなく、それは母親に押しつけられていいものではない。なぜなら、愛着の問題は、誰かが母親機能を果たしていないという点にあるからであるとも述べている⁶。ネガティブな情動感情を和らげる安全基地感覚が親密な世話に代表される母親機能によって子どもの中に形成されるなら、母親機能の役割を担い果たすのは産んだ母親に限定されないと考えられる。親は最初から親になるのではない。子どもとのかかわりによって親となり、人間としての人格的な成長を遂げる側面もある。柏木らは、子どもの養育に主にかかわっている母親は、育児に対して肯定的感情も否定的感情も両方を持ち合わせたアンビバレントな心境にあることがわかっていることを指摘する⁷。しかし、目良は、単に子どもにかかわる時間が長ければ、親となることによって自分が成長したと実感するというのではなく、子どもに接することを通じて経験する肯定的感情と否定的感情の入り混じった複雑な気持ちが親にさまざまなことを考える機会を与え、ひとつのことにこだわらない柔軟さや、他人の立場に立って物事を考えてみるように促しているのではないだろうか、と指摘する⁸。

以上をふまえて本研究では、親から子どものみならず、子どもから親への双方向のかかわりをより良いものとし、そもそも児童虐待が発生しないような環境づくりを構築するための予防的アプローチを検討することとしたい。

2. 研究の方法

本研究は、親子双方向のかかわりを改善する、児童虐待の予防的アプローチとして、特に母子関係を中心に検討する。具体的には、筆者の一人が、母として自分の娘である1女兒に対して、アタッチメント形成、ペアレンティングトレーニング、応用行動分析（ABA）の方法を用いて働きかけた結果について考察する。対象時期は女兒が生後5ヶ月から2歳10ヶ月に至るまでの期間である。分析資料としては、母の記述した育児カレンダー、母子手帳等とする。母は教育関係機関に所属し、教育学に対する知識はあるが、医療職・教職・保育職・福祉職等の専門職ではない。

3. 結果

3.1 アタッチメントを育む働きかけ

人間は、生後すぐから構築される養育者との親密な関係、例えば、エリクソンにおいては基本的信頼関係と称されるが、それを基盤として、他者との関係をつくっていく。この基盤となる一対一の間人間関係を、特にアタッチメントと呼ぶ。数井は、乳幼児だけではなく学齢期も含む「子ども」は、不安な感情を自分で調整することがほとんどできず、養育者に適切に気持ちを整えてもらうことを通して、感情を調整する機能を発達的に獲得していく。この不安の感情を取り払ってくれる養育者に対しては信頼する気持ちを持つようになり、そのように大切に扱われる自分に対しては安心感の気持ちを育むことを指摘する⁹。また数井は以下のようにも指摘する¹⁰。アタッチメント理論の中心は、「恐れ」の調節にあるとされる。乳幼児が感じる「恐れ（不安や危機感）」を養育者によって調整されることが繰り返される中で、アタッチメントは発達する。ここでの養育者は、多くは母

親であるが、血縁関係とは無関係に継続的に養育に責任を持って関わる特定の他者を意味する。この養育者が乳幼児のアタッチメント形成を助ける。乳幼児が何らかの危機・不安を感じネガティブな情動状態に陥る、泣く、発声、ハイハイ等養育者との近接を図るため、シグナルを出す。乳幼児が出すこのシグナルがアタッチメント行動である。養育者と物理的にくっつく・近接する、その際に養育者側から何らかの対応をすぐにしてもらえるとという応答的対応があると、乳幼児の危機感・不安が低減される。つまり養育者によって、乳幼児のネガティブな情動が調節されることによって、乳幼児が安心する。その結果乳幼児が不安や恐れ、危機感がない状態、言い替えれば情動的にニュートラルな状態に戻るのである。

このアタッチメント行動及びアタッチメント・システムが活性化されている状態は、養育時間の中で多くを占めているわけではない。アタッチメント・システムが活性化されていないときは、環境を探索する探索行動及び探索システムが活発化する¹¹。アタッチメントは、ジョン・ボウルヴィを始祖とする考え方である。生後すぐから小学校就学までの子どもとしての「乳幼児」は恐怖や不安・緊張等ネガティブな情動感情を感じた際、養育者に近づき接触を行うことで、そのネガティブな情動感情を和らげる。その養育者を安全基地として、徐々に行動範囲を広げ、探索活動を活発化させる。養育者がアタッチメントを育み、安全基地として確かな存在であればあるほど、乳幼児は外部の世界へ羽ばたいていける。近年保育実践においては、このアタッチメントを育むことに主眼が置かれており、0～1歳の乳児保育においては担当保育士制を取るところも存在する¹²。

アタッチメントは生後すぐから小学校就学までの子どもとしての乳幼児期の発達心理学において、重要な理論であるが、その実践においては個人差が大きい。これは、育児が本質的に親子双方の両方向のベクトルを持つものであることに起因する。そのため、同じ働きかけを行っても、親子それぞれの気質・環境等によって、現れる結果が異なってくる。育児がそのような特性を持つ以上、アタッチメントの育みにおいて万人に共通するものはないと思われるが、その中で比較的效果が高く簡単に取り組める実践を、本論文では記述する。

本研究を実践する母親自身は自分の気質について繊細で、どちらかと言えば緊張感・不安感を感じやすいとの認識があった。そのため、自分の子どもであるA（以下、Aと記す）が他の子どもより、緊張や不安を感じやすいのではないかとの先入観があった。そのため、ボウルヴィのアタッチメント理論を用いて、Aがストレス低減のための対処方略を安定的に構築できる支援実践を行った。

友田は、児童虐待により脳が変容するとの仮説を立て、被虐待下での脳に対する影響をMRIで可視化することを試みている。友田の理論については今後もエヴィデンスを積み重ねる必要があるが、児童虐待における広範囲な影響について、徐々に明らかになりつつある。児童虐待に限らず、自然災害等様々な場面で、私たちは大きなストレスを感じその状況に適応するために、脳が変容する可能性を持つ。その脳変容に対する予防アプローチとしても、アタッチメント形成は注目を集めている¹³。以下に実践内容を示す。

表1 呼名の工夫

Aの名前（Aちゃん）を呼ぶ際に、枕詞を意図的につけた。「お母さんの大好きなAちゃん」「お父さんの大好きなAちゃん」「おじいさんの大好きなAちゃん」「おばあちゃんの大好きなAちゃん」等、事前に準備あるいは即興で様々な呼びかけを行った。単に1回だけ呼ぶだけではなく、「お母さんの大好きなAちゃん」「お父さんの大好きなAちゃん」「B先生（この先生には、Aのなじみのある保育園の保育士等を当てはめた）の大好きなAちゃん」「皆の大好きなAちゃん」等複数の枕詞を連続してつけた。

生後1年未満の乳児期、1歳から小学校就学までの幼児期においては、自尊感情の基盤となる基本的信頼感の育みが必要である。基本的信頼感の心理的発達段階における重要性はエリクソンによって主張されたが、この基本的信頼感の形成に重要な要素を占める肯定的な自己像の育みを主眼に置いた¹⁴。乳幼児の好むリフレイン（繰り返し）や乳幼児の心理的特性「中心化」を加え、アレンジした¹⁵。

表2 替え歌

アニメ「一休さん」の主題歌『とんちんかんちん一休さん』の歌の中のフレーズを取り出し、改編し、意図的に歌うことを行った。「すきすきすきすきすきすきすき あいしてる すきすきすきすきすきすき 一休さん」の一休さんの部分をAの名前であるAちゃんに替え、「すきすきすきすきすきすきすき あいしてる すきすきすきすきすきすき Aちゃん」と、繰り返し歌った。

生後1年を経過するまでの乳児期においては、反復的な音声や叫び、笑い、泣きが、乳児の意思を表す。個人差はあるがおおよそ生後1年を過ぎる頃から「マンマ、プープー」等の「意味のある言葉」を、幼児は発するようになる。8ヶ月頃から2歳前頃までの時期に、本実践を行った。乳幼児の好むリフレイン（繰り返し）、乳幼児の心理的特性「中心化」より着想を得て、基本的信頼感の形成に重要な要素を占める肯定的な自己像の育みを主眼に置いた¹⁶。

表3 指文字

愛着の形成には、触れること（タッチング）が大きな効果をもたらす。そのため、Aの身体の各部分（主に背中、腹部も含む）に指で文字を書く働きかけを行った。この際、指で書く文字は「好き」「大好き」等、肯定的な言葉に限った。Aにおいては、働きかけの始期はおおむね1歳過ぎから開始した。一般的に幼児は否定的な言葉・乱暴な言葉を使うことによる大人の激しい反応がおもしろく、わざと使う側面を持つ。この事象が見られるのは、新しい言葉を覚えること自体が楽しく、子どもの中に周囲の反応を楽しむ余裕が生まれたおおむね3歳以降が多い。指文字での働きかけ当時のAの月齢においては、親密な他者はおおむね母親であり、周囲の反応を楽しむ段階まで発達できていない。そのため、Aが自ら否定的な言葉・乱暴な言葉を要求することはなかったが、母親側からも「バカ」等の否定的な言葉・乱暴な言葉は、一切用いないよう気をつけた。

本実践は、ヘネシー澄子¹⁷、テリー・M・リヴィーの行う「修復的愛着療法」から着想を得た。修復的愛着療法は、現在アメリカでのみ行われている。修復的愛着療法の中の「タッチング」や出産時に行われるカンガルーケア¹⁸、生後2ヶ月過ぎから行われるロッキングをアレンジした¹⁹。

実践時、Aの身体に母親が指で文字を書き、「これ、何て書いた？」と尋ねると、Aは「好き」等と答えた。Aの方からも「大好きって書いて」と母親に対して要求が出るようになり、笑い合いながら母子間で「好き」「大好き」等の双方向のやりとりを楽しんだ。

表4 うまれっこ

Aは体内で骨盤位であったため、予定帝王切開で誕生した。母親の腹部には、帝王切開による手術痕が存在する。この手術痕を用い、生後8ヶ月時より、Aと母親の間で「うまれっこ」と名付けた出産ごっこを行った。まず、母親が仰向けに寝て、Aを腹部の上に座らせる。腹部にAを乗せた状態で「うーん、うーん」と腹痛のふりをする。「お腹が痛い、お腹が痛い」と痛がった後（陣痛を模する）、「チョキチョキチョキ」と手でハサミを作り、手術痕のある母親の腹部を切る真似をする。「おぎゃあ、おぎゃあ」と赤ちゃんの産声を真似た後、「やったあ」とAに声を掛ける。「やったあ、Aちゃんが産まれたぞ。世界一の赤ちゃんだ。お母さんにとって、世界一の赤ちゃんだ。すばらしい赤ちゃんだ」とAに話し掛けた後、Aを抱き締め、「Aちゃん、生まれてくれてありがとう」と繰り返した。この働きかけは当初、母親が「うまれごっこ」と呼んでいたが、Aが発音しやすい「うまれっこ」に変わり、その名前で定着した。

本実践は、ヘネシー澄子²⁰、テリー・リヴィーの行う「修復的愛着療法」、ベッセル・ヴァン・デア・コークの行うトラウマ治療²¹の考え方から、着想を得た。修復的愛着療法の中の「タッチング」やトラウマ治療の中の「感覚を取り戻す」（五感を利用する）、出産時に行われるカンガルーケア、生後2ヶ月過ぎから行われるロッキングをアレンジした。

母親や周囲がマイナスイメージを持ちやすい帝王切開の手術痕を手掛かり刺激にして、トラウマで発生するフラッシュバックからヒントを得て、アレンジした。母子双方が手術痕や出生に関し、良いイメージを持てるように配慮した。Aの月齢が進んだ後は、受精から出生までを撮影した写真集も併用した²²。

表5 くすぐり

意図して身体接触を増やすため、おむつ替え終了時・起床時等、折に触れ、Aの腹部を「ちょよちょよ」と言いながらくすぐった。くすぐりの際、必ず決まった「ちょよちょよちょよ」という言葉を掛けることで、Aの期待感を満たした。またAの予測可能・予定調和な行動を常にとることで、本児の安心感を育み、因果関係の理解に繋がることにつとめた。

本実践は、ヘネシー澄子²³、テリー・リヴィーの行う修復的愛着療法、ベッセル・ヴァン・デア・コークの行うトラウマ治療²⁴の考え方から、着想を得た。修復的愛着療法の中の「タッチング」やトラウマ治療の中の「感覚を取り戻す」、出産時に行われるカンガルーケア、生後2ヶ月過ぎから行われるロッキングをアレンジした。

また、PTSDの発症を抑える「レジリエンス（弾力性）」²⁵をAの中に育みたいと考えた。決定的な損ないがないことが最善ではあるが、誰にとっても「何が起こるかかわからない」のが人生である。将来的なトラウマを乗り越えるための予防的取組として、Aがいつも安心感を得られるように配慮した。

3.2 ペアレンティングトレーニングとしてのネガティブな情動（怒り）のコントロール

母親は教育機関に所属することもあり、叩く・怒鳴る・甘やかす等の暴力・暴言・過干渉によるデメリットに関し、知識があった²⁶。一般的に、母親は出産経験により、子どもと一体感を感じやすい。そのためアンガーマネジメント²⁷をアレンジし、意図的にAとの間に境界線を引くことを心が

けた²⁸。具体的には、Aの行動によって突発的で強烈な怒り等のネガティブな情動を感じた際は、「Cさん」とAを意図的に名字で呼んだ。母親はネガティブな情動を感じている間中、「Cさん」とAを名字で呼び続けた。そうすることで、子どもは自分の連続線上にあるのではなく、自分とは異なる人間で異なる人格を持つことを思い出すことを、母親自身が心がけた。

Aはどちらかと言えば、穏やかで粘り強い気質であったが、その粘り強さが頑固さとして発現することもあった。時間的な余裕がないときに、Aが一度やりかけたことをやめず、困ったこともあった。その際はAに対し、口頭で時間がないことを説明し、やめるように頼んだ。例えば、「急いでいます。Aちゃん、すみませんが〇〇をやめてください」。何回か頼んでもやめない場合は、母親は「急いでいます。すみませんが、Cさん〇〇をやめてください」とAの名字を呼んで、丁寧に頼んだ。Aが行動をやめるまで、同じ文言・調子で、連続して頼み続けるブローケン・レコードテクニック²⁹を用いた。行動をやめた後、「私と一緒に△△してください」と頼み、行動を小分けにする、スモール・ステップ³⁰を用いた。そのうち、Aも母親が「Cさん」と名字を呼び始めた際は、「この行動は不適切なんだな」と察するようになり、母親が「Cさん」と名字を呼ぶことは、少なくなっていった。またそもそも論として、そのような状況をつくらない環境整備を母親自身が行った³¹。例えばそれらは、時間に余裕を持つ、約束の相手に対して、事前に事情を話しておく等である。

3.3 応用行動分析 (ABA)

3.3.1 視覚と言語化によるプロンプト

母親は、行動に移る前に対象物を示し、その上で行動を言語化することを心がけた³²。

表6 ドアを開けて部屋に入り、ドアを開けて退出する場合

母：部屋に入る際、ドアの近くの壁を2度「コツコツ」と軽く叩く。 「〇〇（ドアに入って、部屋の中で行う行動）するから、この部屋に入ります」と声を掛ける。 ↓ ドアを開けて、部屋の中に入り、行動を行う。 部屋の中での行動が終わる。 ↓ 母：ドアの近くの壁を2度「コツコツ」と軽く叩く。「〇〇（部屋の中で、行った行動）が終わったから、この部屋を出ます」と声を掛ける。 ↓ ドアを開けて、退出する。

次の行動に移る前に、必ず近くを「コツコツ」と2度叩いた上で、言語によって「次は〇〇するので、△△します」「次は〇〇するので、△△してください」等丁寧に予告・説明・依頼することを心がけた。

表7 靴を履く場合

母：Aの靴の近くの床を2度「コツコツ」と叩く。 ↓ 母：（Aがまだ自分で靴を履けない場合）「外に出るので、靴を履きます」。

母：(Aに) 靴を履かせる。

↓

母：(Aが自分で靴を履ける月齢になった場合)「外に出るので、靴を履いてください」(なかなか靴を履かない場合は、母親が靴を指さす)。

A：靴を履く。

母：「靴を履いてくれて、ありがとう。お母さん、助かります」。

本支援は、視覚・音によるプロンプト（予告）と言語による行動の説明を組み合わせ、長期間行った。

プロンプトは、徐々に減らすことが基本である。この支援は、Aが「貸して」「手伝って」等自分の要求をある程度言語化できる状態まで続けられた。その後、次の行動を視覚で示す支援、例えば行動に移る前に対象物の近くを2度叩くは、Aと母親間では自然に消滅した。言語による支援としての次の行動の説明は、現在も続けられている。

表8 靴を履きドアを開けて、戸外へ出る場合（言語による支援のみ）

母：「Aちゃん、一番は靴・二番はドアだよ」(見通し)「まず、靴を履いてくれる？」(言語による教示)。

A：靴を履く（靴をなかなか履かない場合は、母親が靴を指さす）。

母：「自分で靴を履いてくれてありがとう。助かります」(標的行動を特定しない強化)「次は、ドアを開けてくれる？」(言語による教示)。

A：ドアをあける（ドアをなかなか開けない場合は、母親がドアを指さす）。

母：「ドアを開けてくれて、ありがとう。助かります」(標的行動を特定しない強化)。

「Aちゃんが、そうやってお母さんのお願いしたことをいつもやってくれるから、お母さん凄く助かるよ。お母さんをいつも助けてくれてありがとう」(標的行動を特定せず、適応行動それ自体を増加させる強化)。

本実践においては、Aの「自分でやりたい」との思い（自発性）・「自分は役に立っている」（貢献感）も、同時に満たすことを心がけた。適応行動の増加・自発性の受容・貢献感の育成の3要素を満たすことを目的とし、実践を組み立てた。

3.3.2 シール（トークン）による社会的適応行動の強化

Aは元々非常に穏やかで、粘り強い気質であったため、特に問題行動が頻出するわけではなかった。また母親による早期の働きかけがあり、他者による介入が常に行われている状態であった。そのため、特に標的行動を設定せず、Aの望ましい行動としての適応行動をさらに促進・強化することを目的とした。強化教材としては、月間スケジュールとしてのシール帳としての手帳とシールを使用した。月間スケジュールの表の横軸は、月～日曜日まで7日間、日曜日が赤色となっ



写真1 シール帳の見開きページ

ている。その週間の横軸を利用し、Aが適応行動を行う度にシールを貼って強化した。何が適応行動でそうでないかは、個人の価値観により影響される。ここでの強化は、母親の主観に偏らないよう、社会的な適応行動増加を目的とした選別とした。全体的な適応行動の増加を意図したため、即時強化せず、適応行動が7個の赤色の欄まで待ち、達成されたらAの好む強化刺激を与えた。強化刺激はAの好む菓子が多かった。またあらかじめ「ここまできたら、Aちゃんの好きなお菓子を選んで買おうね」と、教示しておいた。

使用した手帳が7×5の35マスであったため、Aが35の適応行動を行いマスが全部埋まった35個達成時は、7個達成時の通常の強化刺激に加えて、特別な強化刺激を与えた。

表9 シール帳とシールによる社会的適応行動の強化（通常の場合）

母：「Aちゃん、これAちゃんのシール帳とシールだよ」とシール帳を開く。 「Aちゃん、いつもお母さんのこと助けてくれるでしょう？Aちゃんがお母さんのことを助けてくれる度に、このシールを貼ろうよ」とシール帳の横軸（月～日曜日までの7日間を指でなぞり、日曜の赤の欄を指で指す）を示す。 「これ、ここの横全部シールで埋まったら、Aちゃんの好きなお菓子を買おうよ。Aちゃんが、お母さんをいつも助けてくれるお礼だよ」。
↓
A：適応行動を行う。適応行動によって月～日曜日の横軸がシールで埋まっていく。その際にはAが自分勝手にシールを貼らないように配慮した。Aの適応行動の後、母親の指示でA自身がシールを貼るよう教示した。日曜の赤の欄にシールを貼る。
↓
母：「Aちゃん、ありがとう。凄いなあ。こんなにお母さんのことを、助けてくれたんだね。シールがもう赤のところまできたよ。いつもお母さんのことを助けてくれるお礼に、Aちゃんの好きなお菓子をプレゼントするよ。一緒に買いに行こう」。
↓
A・母：一緒にお菓子を買に行く。

表10 シール帳とシールによる社会的適応行動の強化
（35の適応行動を行い見開きの1ページが埋まった場合）

母：「Aちゃん、もうすぐこのページ、シールで全部埋まるね」、「埋まったら、いつものプレゼントの他にスペシャルプレゼントもあるよ。楽しみだね」と、あらかじめ、教示しておく。
↓
適応行動で、見開き1ページがシールで埋まる。
↓
母：「Aちゃん、凄いな。いつもお母さんのこと助けてくれるから、このページがもう全部埋まったよ。いつも本当にありがとう」。
↓
A・母：シール帳（手帳）を開いて、一緒に見る。
↓
母：「ジャジャジャーン。これ開けてみて」と、用意していたプレゼント（いつもより豪華なお

菓子)を渡す。



A：プレゼントを開ける。



母：「Aちゃん、お母さんをいつも助けてくれて本当にありがとう。また、お菓子を買に行こうね」。

本実践においては、Aの「自分でできた」との思い(達成感)・「自分は役に立っている」(貢献感)・「自分はこんなに頑張れるんだ」(自己信頼)も、同時に満たすことを心がけた。適応行動の増加・貢献感の育成・自己信頼の育成の3要素を満たし、シール帳による視覚的な満足も得られるように配慮した。

4. 考察

本研究では、アタッチメント形成、ペアレンティングトレーニング、応用行動分析の観点から、母親の介入について考察した。

アタッチメント形成では肯定的自己像を育むための呼名の工夫、基本的信頼感の形成のための替え歌、スキンシップを意識した指文字、うまれっこ、くすぐり等を行った。ペアレンティングトレーニングとしてのネガティブな情動のコントロールでは、呼名の変更、ブロークンレコード、スモール・ステップを意識してかわりを行った。応用行動分析では、視覚と言語化によるプロンプト、トークンによる社会的適応行動の強化を行った。

アタッチメントが適切に形成されると、母子間のかかわりに良い影響を与える。子どもが常に安心感を持てる支援は、子どもの情緒を安定させる。子どもが安定すると、母も安定し、良いサイクルを生み出しやすくなる。意図して肯定的な言葉がけを行うことが自尊感情を育むことにもつながると考えられる。

ペアレンティングトレーニングでは、子どもは、自分とは異なる人間で異なる人格を持つことを思い出すことを母親自身が心がけ、暴力・暴言・過干渉に至ることを回避した。

応用行動分析ではプロンプトやトークンによって、適応行動の促進・強化を行った。

母子のかかわりは双方向であるため、それぞれの気質や特性を配慮しながら、継続的に介入を行うことが重要である。

謝辞

本研究は、多くの方にご協力・ご支援・ご指導をいただきました。今まで取り組んできた研究を論文として形にすることができましたのは、高知県教育委員会幼保支援課、子ども支援ネットみんなのひろっぴ、NPO法人 女性と子どものエンパワメント関西、高知言語教育応用行動分析研究会等の皆様のおかげです(敬称略・順不同)。何より、本研究は子どもの存在なくしては語れません。本論文中のAに心から感謝します。本研究に、ご協力いただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げ、謝辞にかえさせていただきます。

註・引用文献

¹ 厚生労働省により2007年に創設された「生後4か月までの全戸訪問事業(こんにちは赤ちゃん事

- 業)。児童福祉法(昭和22年法律第164号)第6条の3第4項に市町村による努力義務として「乳児家庭全戸訪問事業」の名称で規定・2009年から実施。<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate12/01.html> (2016年11月29日参照)。
- ² 代表的なものとしては、アメリカオレゴン州における「ヘルシースタート」プログラム等が存在する。このプログラムは、1994年に州内の4つの群で試験的に始まった。2003年にはオレゴン州全域に拡大する。「ヘルシースタート」プログラムには子ども一人当たり年間2,500ドル必要だが、問題行動等で思春期以降に少年院等の矯正施設に入所すると一人当たり年間50,347ドルの経費が必要である。妊娠時に受診した医療機関が、対象となる要支援家族を「ヘルシースタート」プログラムに紹介する形を取る。要支援要素は妊婦の孤立・貧困・未婚・薬物(アルコール)依存等、15項目になる。プログラムは利用者(要支援家族)には無料で提供される。費用は州からの助成金・寄付金等で賄われる。
- ³ 特定の者に家事・育児負担が集中することを、ワンオペ(ワンオペレーション)育児と呼ぶ。牛丼店などで従業員1人が全ての業務を切り盛りすることで問題になった「ワンオペ(ワンオペレーション)」が語源で、育児や家事を1人で担い、破綻(はたん)寸前の状況をあてはめている。総務省の社会生活基本調査(2011年)によると、家事関連に使われる時間は、女性の平均1日3時間35分に対し、男性はわずか42分だった。女性の社会進出が進んでも、家事の大半を女性が担う状況は変わらない。厚生労働省の調査では、男性の休日の家事・育児時間が長い夫婦ほど第2子を持つ傾向があり、男性の協力の度合いが影響していることがうかがえる(2016年12月3日朝日新聞)。
- ⁴ 渡辺久子(2000)『新訂増補 母子臨床と世代間伝達』金剛出版。
- ⁵ 米澤好史(2015)『「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラム』福村出版。
- ⁶ 上述5, 米澤好史(2015)。
- ⁷ 柏木恵子,若松素子(1994)「親となる」ことによる人格発達:生涯発達の視点から親を研究する試み『発達心理学研究』5,pp.72-83。
- ⁸ 日良秋子(2001)父親と母親の子育てによる人格発達『発達研究』16,pp.87-98。
- ⁹ 数井みゆき(2012)『アタッチメントの実践と応用-医療・福祉・教育・司法現場からの報告』誠信書房。
- ¹⁰ 上述9, 数井みゆき(2012)。
- ¹¹ 前掲9, 数井みゆき(2012)。
- ¹² 例えば、社会福祉法人やまぼうし保育園(兵庫県)、社会福祉法人親愛会音のゆりかご保育園(千葉県)等が挙げられる。
- ¹³ 友田明美(2011)『いやされない傷-児童虐待と傷ついていく脳』診断と治療社,友田明美(2014)『子どものPTSD-診断と治療-』診断と治療社。
- ¹⁴ 明橋大二(2005)『子育てハッピーアドバイス』1万年堂出版,明橋大二(2006)『子育てハッピーアドバイス 2』1万年堂出版,明橋大二(2006)『子育てハッピーアドバイス 3』1万年堂出版。
- ¹⁵ 佐々木正美(1998)『子どもへのまなざし』福音館書店,佐々木正美(2001)『続 子どもへのまなざし』福音館書店,佐々木正美(2011)『完 子どもへのまなざし』福音館書店,佐々木正美(2006)『0歳からはじまる子育てノート-エリクソンからの贈りもの』日本評論社。
- ¹⁶ 前掲14, 明橋大二(2005),明橋大二(2006),明橋大二(2006)。
- ¹⁷ ヘネシー澄子(2004)『子を愛せない母 母を拒否する子』学習研究社,ヘネシー澄子(2006)『気になる子 理解できる ケアできる』学習研究社。
- ¹⁸ 「カンガルーケアでは、母親と赤ちゃんが肌を合わせ、そこから母親の体の温かさ、肌において、

- 心音、医者や看護師と話す声などを感じることで、未熟児の脳の発達を助ける。また母親にとっても、自分にしかできないことをしているという使命感を持つことができ、わが子への愛情が深まるという効果がある」前掲17,ヘネシー澄子 (2004).
- ¹⁹ 「カンガルーケアの2ヶ月後くらい後に行うロッキングは、赤ちゃんの脳内の緊張を和らげ、快感と癒しの感覚を覚えさせるという。母親が行うマッサージもそうだが、赤ちゃんと母親のスキンシップはとても重要である。スキンシップは赤ちゃんの気持ちを落ち着かせ、愛情を伝え合う」。前掲17,ヘネシー澄子 (2004).
- ²⁰ 前掲17,ヘネシー澄子 (2004),ヘネシー澄子 (2006).
- ²¹ ベッセル・ヴァン・デア・コーク (2016)『身体はトラウマを記録する』紀伊國屋書店.
- ²² レナルト・ニルソン (2016)『A Child is Born-赤ちゃんの誕生』あすなろ書房.
- ²³ 前掲17,ヘネシー澄子 (2004),ヘネシー澄子 (2006).
- ²⁴ 前掲21,ベッセル・ヴァン・デア・コーク (2016).
- ²⁵ 「私たち保護者としての役割は、子どもをあらゆるトラウマ的出来事から守ることではなく、子どもの『弾力性』を増し、社会生活に順応できる人を育てることである。子どもの年齢に合った『こころの傷の応急処置』を知り適切に対処できれば、子どもはトラウマに対する『弾力性』を身につけることができる」前掲17,ヘネシー澄子 (2006).
- ²⁶ エリザベス・クレアリー (2010)『叩かず 甘やかさず 子育てする方法』築地書館.
- ²⁷ 戸田久美 (2015)『アンガーマネジメント—怒らない伝え方』かんき出版,篠真希,長縄史子 (2015)『イラスト版 子どものアンガーマネジメント—怒りをコントロールする43のスキル』合同出版.
- ²⁸ ミミ・ハイネマン (2014)『子育ての問題をPBSで解決しよう!』金剛出版,エリザベス・クレアリー (2010)『叩かず 甘やかさず 子育てする方法』築地書館.
- ²⁹ シンシア・ウィットム (2002)『読んで学べるADHDのペアレントトレーニング—むずかしい子にやさしい子育て』明石書店.
- ³⁰ shizu (2013)『発達障害の子どもを伸ばす魔法の言葉かけ』講談社.
- ³¹ 前掲29,シンシア・ウィットム (2002),前掲28,ミミ・ハイネマン (2014).
- ³² ポール・A・アルバート・A・C・トルーマン (2004)『はじめての応用行動分析 日本語版』二瓶社,藤坂龍司,松井絵理子 (2015)『イラストでわかるABA実践マニュアル—発達障害の子のやる気を引き出す行動療法』合同出版,前掲30,shizu (2013).